

この人に聞く「地域で子育てを支える『担い手』」



「地域のおじさん・おばさんにこそ」

新宿区北山伏町で、公立保育園の跡地を活用し、区との協働モデル事業として、地域の子育て先輩や当事者が運営する子育て支援施設“ゆったりーの”。その運営委員会代表を務めている小原聖子さんに、地域で子育てを支える「担い手」について伺いました。

Q. “ゆったりーの”について教えてください

“ゆったりーの”では、親子の居場所となる子育てひろばの運営と、子育てに関わる団体の交流拠点事業、子育て支援者養成事業などを行っています。

「子育て支援」というよりは、「あったらいいな、できたらいいなをカタチにする」をキャッチフレーズに、利用者自身が、ここに来てちょっと息抜きをして元気になり、仲間を作って、やりたいことを実現していく、子供の手が離れてきたら支援者側に回る…そんなことを理想に運営しています。

Q. 地域が乳幼児の子育て家庭を支えるために必要なことは何だとお考えですか？

確かアフリカの方の格言で「こども一人を育てるのには村人100人の力が必要」という言葉を聞いてとても共感しました。子育て家庭を支えるためには、「このサービスだけあればよい」「こんな人が一人いたらよい」ということではなく、いろいろな場面でいろいろな人が多面的に支えてくれることが重要なのではないのでしょうか。

そのためには、子育て家庭が集まる場所(サロン・ひろば・幼稚園・保育園・学校)に関わる方だけではなく、ご近所や、お店、乗り物で居合わせる全ての人が、その子の育ちに関わっていて支えていると思ってくれたら素敵ですね。

社会全体で子育てを支えるというのは、子育てサービスを増やすということではなく、まずそういうまなざしをみんなが持つということが必要だと思います。



ゆったりーの「きたやまカフェ」。いつも食事ができるこの場所は、カフェと呼んでママにホッとしてもらえスペースでもあります

Q. どんな人に「担い手」になってもらえばいいのでしょうか？

だれでもあらゆる場面で「担い手」になれると言えます。子育て家庭が、専門家や特殊なスキルを持っている人に助けを求めなければならない場面はとても限られています。

むしろ、日常生活で、あらゆる場所(例えばお店や交通機関など)で暖かく迎え入れてもらえること、身近な人が相談に乗ってくれること、同じような境遇(例えば子供の月齢が同じ、同じ悩みを持っている)の仲間に出会うことが大切です。そのきっかけやつながりを作ったり、その身近な信頼できる人になることが「担い手」の役割ではないかと思います。

そう考えれば、近所のおじさん・おばさん(お兄さん・お姉さん?)として、誰でも常に、「担い手」になれるし、ハンディキャップや悩みを持っていても逆に同じ境遇で悩む親子に寄り添うこともできるのではないのでしょうか。

Q. 地域で活動する「担い手」に求められるスキルはどのようなものだとお考えですか？



新米ママも、学生さんにオムツの替え方を教える時は先生になるのです！

地域の身近な「担い手」には専門的な知識や特殊なスキルはあまり必要ないと思っています。むしろ、持っていたとしても、それをそっと隠すスキルが必要かもしれませんね。

一番難しいのは、相手にとって信頼できる存在になることです。そのために、「受容的・共感的態度で接する」こと、「こちらの指示や判断を示すのではなく、親や子供の力を信じ最大限に引き出し、親や子供自身が意思決定をする援助をする」こと、これは分かっているても実はとても難しいことです。求められるスキルがあるとしたらこういった事ではないかと思っています。そういう意味では、「担い手」とは、実は、懐深い心と、広い見識と、幅広いネットワークが必要な、奥深い役割ですね。

「“ゆったりーの”を運営することで、実は誰よりも自分自身がスタッフや利用者の皆さん、地域の皆さんに助けられて、3人の子育てをしているんですよ」と笑顔で語る小原さん。

小原さんには、「担い手」養成研修カリキュラムの作成にも関わっていただき、平成21・22年度地域における家庭教育支援チームの「担い手」養成研修の講師を務めていただきました。

「ゆったりーの」のホームページ <http://www.yuttarino.org/>